情報メディア学会 第13回研究大会

日程 2014年6月28日(土)

場所 科学技術振興機構(東京)

主催 情報メディア学会

情報管理 57(6), 429-431, doi: 10.1241/johokanri.57.429 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.57.429>)

1. はじめに

情報メディア学会は、このたび「デジタル化を拒む素材とアウトリーチ」を基調テーマとして第13回研究大会を開催した。本テーマの背景には、研究資料のデジタル化について、グローバル規模でみると日本は出遅れており、海外の研究者や国内のとりわけ若手研究者が資料にアクセスできない現状は致命的である、という問題意識がある。本研究大会は、総括を先取りするなら、このようなデジタル化を阻む要因の探索と解決策の模索への問題意識を喚起し共有する貴重な機会になったと言えるだろう。

2. パネルディスカッション「デジタル化を拒む素材とアウトリーチ」

本研究大会の基調テーマ「デジタル化を拒む素材とアウトリーチ」を議題としたパネルディスカッションでは、江上敏哲氏（国際日本文化研究センター）

をコーディネータに、パネリストとして大場利康氏（国立国会図書館）、後藤真氏（花園大学文学部文化遺産学科）、茂原暢氏（公益財団法人渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター）、田中政司氏（株式会社ネットアドバンス）にご登壇いただいた。

まず江上氏より、《デジタル化はなぜ進まないのか》《ユーザはどこにいるのか》という2つの問いが提起された。つまり、まずそもそもデジタル化された日本研究資料が深刻に不足しているという問題がある。さらに、キャリアパスの都合で大学の籍から離れざるをえない多くの若手研究者らが図書館サービスの対象から外れてしまっているという「若手研究者問題」をはじめとしたアウトリーチ活動の問題がある。これらの問題を背景に、デジタル化資料を「つくる」「つたえる」「つかう」という3つの観点から議論するという、パネルディスカッション全体の枠組みが提示された。

登壇者

大場氏からは、デジタル化のリスクとコストを誰が引き受けるかという問題が提起された。すなわち、デジタル化には、アクセス改善や現物代替・拡張の面でメリットがある一方、デジタル化推進のための経済的負担やデジタル資料への不満や権利関係のリスクなどデメリットも大きい。両者を天秤^{てんびん}にかけたときに後者が勝っているという現状が、デジタル化を阻む壁になってきたことが指摘された。

茂原氏からは、実際にアーカイブを運営してきた立場から、「つづける」という4つめの論点が提案され、デジタル資料の運営における検索と継続という2つの困難が指摘された。すなわち、デジタル化された資料が、たとえ一般的なWeb検索エンジンで上位に入っている、アカデミックな検索システムに参入していないと発見されづらいことや、デジタル・アーカイブの持続的運用の困難と重要性が指摘された。

田中氏からは、商用コンテンツとしての日本語データベースに携わるサービスベンダーの立場から、日本と海外の電子資料市場の問題点や魅力が紹介され、今後の課題として、ビジネスモデルを確立すること、コンテンツに適切な価格を設定すること、持続的に運用可能な基盤を整備すること、利用を促進するために環境整備・人材育成すること、という4点が提示された。

後藤氏からは、デジタル・アーカイブの利用の視

点からの論点が提供された。多くのアーカイブでは権利関係や利用規程の明確さが研究用途には不十分であることや、情報発見サービスの不十分さや若手研究者問題に代表されるアクセス格差などアーカイブ発見の枠組みが整備されていないことや、研究用途での利用にはデータの永続性が重要であることなどが指摘された。

休憩をはさんだパネルディスカッション後半では、フロアからの質問をもとにパネリスト全体で討議が行われた。持続的運営、データベースの継承や連携、人材育成、ユーザからのフィードバック、ユーザの定義など、議論は多岐にわたり、盛況のうちに幕を閉じた。

3. ポスター発表

本研究大会では、基調テーマに限定せず、最新の研究成果をポスターで発表する場を設けている。今回は6件のポスター発表があり、企画委員により優れた発表2件を推薦発表に選出した。

推薦発表の1件目は、永崎研宣氏（一般財団法人人文情報学研究所）より「デジタル化を拒む素材の近況：古典資料における文字の符号化」として、日本語文化資料のデジタル化をさまたげる問題のひとつとなってきた異体字の符号化について、『大蔵経』のデジタル化を通じた事例報告が発表された。文化・

会場風景

学術的用途の異体文字符号化への理解が近年高まってきたこともあり、異体文字符号化問題は、技術的には解決の見通しが立っているが、そのほかにも、符号化提案の継続的取り組みや異体字の効率的な管理共有や規格の見直しといった課題が残されていることが指摘された。質疑応答では、異体文字符号化の意義や包摂の基準について議論が交わされた。

2件目は、大原司氏（筑波大学情報学群知識情報・図書館学類）、佐藤翔氏（口頭発表者／同志社大学社会学部教育文化学科）、逸村裕氏（筑波大学図書館情報メディア系）により「心理学分野におけるオープンアクセスの進展—『筑波大学心理学研究』掲載論文の引用調査から—」が発表された。国際的な生命科学分野と比較すると、日本の心理学分野のオープンアクセス化は発展途上であり、そもそも電子化自体が遅れている現状が浮き彫りにされた。質疑応答では、地理的条件とオープンアクセス化の影響関係や、被引用頻度とオープンアクセス化の関係について議論された。

一般発表では、角田裕之氏（口頭発表者／鶴見大学）、孫媛氏（国立情報学研究所）、西澤正己氏（国立情報学研究所）、刘筱敏氏（中国科学院文献情报中心）により「高被引用論文の学術機関リポジトリの登録調査の研究」、植村八潮氏（口頭発表者／専修大学）、野口武悟氏（専修大学）、成松一郎氏（専修大学）、松井進氏（千葉県立西部図書館）により「電子書籍サービスシステムの現状と課題」、井規子氏（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科）より「国立大学図書館における貸出以外の利用状況の変化を示す指標の提案」、神山資将氏（一般社団法人知識環境研究会）より「医療・介護等の多職種連携教育方策としての、メタ認知を促す思考スキーム」について口頭発表が行われた。さらに、ポスター展示エリアにて、ポスター発表者と参加者とのディスカッションの場が設けられ、活発な議論が交わされた。

4. 総括

本研究大会の基調テーマは、現代のグローバルな

状況における研究活動そのものの環境にかかわる重要な問題であり、今後も広く問い続けられるべき問題であろう。時間の都合で本研究大会では議論できなかった論点もまだまだ数多くあるはずである。たとえばひとつ報告者からささやかながら視点を付け加えさせていただくならば、アウトリーチの問題は、『若手』研究者問題が議論の出発点のひとつとされているが、デジタル資料へのアクセスに研究機関への所属が求められる現状は、同時に『定年』研究者にとっても同様の問題をひき起こし始めていることも指摘できるだろう。

パネルディスカッションの最後に江上氏は、アウトリーチとは、ユーザへの一方的な提供の問題ではなく、社会全体への貢献にかかわる問題であることを強調していた。本研究大会がこのような問いかけの貴重な機会となったことは間違いないが、ここでもう一步踏み込んで報告者からひとつだけ問いを提起することを許していただけるならば、「社会全体」といったときそれが何を指すのかを問うことが、「デジタル化を拒む素材とアウトリーチ」がそもそも問題になる背景についての探求には欠かせないようにも思われる。これは、デジタル化の諸相において、グローバル化とローカル化が正比例する場面と反比例する場面があるということでもある。たとえば基調テーマやパネルディスカッションの議題では「日本の」デジタル化が問題になっていたが、ここで「日本の」というとき、その意味が問われるということでもある。

このように、本研究大会の基調テーマはまだまだ議論が尽きない。それだけ興味深い議題であり、またそれを広く共有しコミットメントを促すシンポジウムと研究発表が集まったということ、強調しておきたい。

（情報メディア学会大会企画委員会

原島大輔、石川大介、植松利晃、岡野裕行、
岡部晋典、角田裕之、中林幸子、天野晃）